

には広く分布しているようで、海外では台湾、フィリピンまで見られ、広域分布種と言える。

## 謝辞

九州の記録を教えていただいた今坂正一氏、佐々木茂美氏、三宅武氏、愛媛大学のコレクションや個人データを提供していただいた愛媛大学の松尾進氏に厚く御礼申し上げる。また、台湾の地名についてご教示を頂いた上野俊一博士に感謝申し上げます。

## 引用文献

- 平野幸彦, 1990. ヒラタコメツキモドキ八丈島に産す. 月刊むし, (233): 41.  
 平野幸彦, 1995. ヒラタコメツキモドキの分布など. 月刊むし, (298): 24-25.  
 今坂正一, 2001. 久留米市高良山とその周辺の甲虫 I—未記録と興味深い種. KORASANA, (79): 31-48.  
 今坂正一, 2012. 島原半島産甲虫覚え書き 3—2011 年までの訂正と追加—こがねむし, (77): 59-68.  
 磯野昌弘・斎藤直彦, 2007. 福島県におけるヒラタコメツキモドキの記録. 甲虫ニュース, (159): 6.

- 亀沢 洋, 2011. 埼玉県東部におけるヒラタコメツキモドキほかの記録. 寄せ蛾記, (142): 40-41.  
 城戸克弥・小田正明, 2006. 鹿児島県稲尾岳山麓で採集した甲虫類 I. KORASANA, (73): 37-53.  
 水野弘造・荒田弥五郎, 2005. こめつきもどき科. 荒田家(京都府舞鶴市高野台)の邸宅内で採集された甲虫類の目録. Pp. 56-57. 日本甲虫学会.  
 生川展行・中山 惇・岡由佳里・横関秀行・稲垣政志・官能健次, 2011. 志摩半島の甲虫. 志摩半島の昆虫. Pp. 66-195.  
 Sasaji, H., 1989. Discovery of the curious beetle genus *Xenoscelinus* Grouvelle (Languriidae-Cryptophilinae) from Japan. Kanagawa Chūhō, (90): 223-228.  
 佐々治寛之, 1990. ヒラタコメツキモドキ発見のいきさつ. 月刊むし, (235): 53.  
 佐々木茂美, 2011. 大分県西部地方の甲虫 (2010). 二豊のむし, (49): 9-32.  
 釣巻岳人, 2007. ヒラタコメツキモドキを東京都板橋区で採集. 甲虫ニュース, (159): 6.  
 Wegrzynowicz, P., 2007. Erotylidae. Catalogue of Palaearctic Coleoptera 4. (Edited Löbl, L. & A. Smetana). Pp. 531-546. Apollo Books, Stenstrup.  
 山地 治, 2006. 岡山県から採集した甲虫類の記録. すずむし, (141): 19-20.

(2012 年 4 月 10 日受領, 2012 年 5 月 24 日受理)

## 【短報】日本産陸生ガムシ類の学名変更について

日本産陸生ガムシ (=ハバビロガムシ亜科) に、セマルマグソガムシ *Megasternum gibbulum* Motschulsky, 1866 (図 1) という種がいる。佐藤 (1985) による日本産ハバビロガムシ亜科の属への検索表がよくできているうえに、日本産本属は 1 種であることから、各地の甲虫目録で目にすることも少なくない種である。本種は、学名が記す通り、Motschulsky (1866) によって命名された種である。その後、Shatrovskiy (1989) が、ロンドンのルイスコレクションを用いて、日本産本属の別新種 *Megasternum japonicum* を記載した。この Shatrovskiy (1989) が記載した *M. japonicum* のパラタイプが北海道大学に保管されており、筆者は、それを調べた結果、*M. gibbulum* と同種であると判断した。そして、故佐藤博士と共著で、*M. japonicum* は、*M. gibbulum* のシノニムであるとした (Hoshina & Satō, 2005)。その後、*M. gibbulum* は、韓国からも発見された (Hoshina & Cho, 2008)。



図1. セマルマグソガムシ (兵庫県産標本)。

しかし、最近、

Fikáček *et al.* (2012) によって、セマルマグソガムシの学名変更がなされた。これによると、1) Motschulsky (1866) によって、*M. gibbulum* として記載された種は、日本や極東ロシア、中国などに分布するマグソガムシ *Pachysternum haemorrhoum* Motschulsky, 1866 と同物異名 (=シノニム) であり、*Megasternum* 属ではないこと、2) 一方、*M. japonicum* はまぎれもなく *Megasternum* 属に含まれること、3) それにともない、*M. japonicum* という学名が復活すること、となった。つまり、日本に生息する *Megasternum* 属が 1 種のみという Hoshina & Satō (2005) の判断は間違いではないが、和名セマルマグソガムシとされていた種に対応する学名は、*Megasternum japonicum* Shatrovskiy, 1989 となる。なお、佐藤 (1985) に掲載されているセマルマグソガムシの写真と形態の説明文は、日本に生息している種に合っている。したがって、1985 年当時は未記載種であったセマルマグソガムシが、対応学名が誤った状態で図鑑に載っていた、と理解していただきたい。繰り返しになるが、上記のことを要約すると、「日本には、*Megasternum* 属は、*Megasternum japonicum* Shatrovskiy, 1989 の 1 種のみが生息する」ということだ。種の中身が特に変わったわけではないので、*M. japonicum* に対応する和名は従来の「セマルマグソガムシ」を使用したい。

なお、蛇足ではあるが、Fikáček *et al.* (2012) は、

国後島産の *M. japonicum* の標本を調べており、「*M. japonicum* は、日本と露国の両方に生息する種」としている（注、Fikáček *et al.* (2012) は、Hoshina & Cho (2008) を引用していない）。日本人としては、当然ながら、この見解に従うことはできない。よって、筆者は、今後も、*M. japonicum* は、「日本と韓国にのみ生息する種である」と扱っておく。

#### 引用文献

- Fikáček, M., F. Jia & A. Prokin, 2012. A review of the Asian species of the genus *Pachysternum* (Coleoptera: Hydrophilidae: Sphaeridiinae). *Zootaxa*, 3219: 1–53.
- Hoshina, H. & Y. B. Cho, 2008. Notes on the subfamily Sphaeridiinae (Coleoptera: Hydrophilidae) from Korea, I. The *Entomological Review of Japan*, 63: 125–127.
- Hoshina, H. & M. Satō, 2005. Synonymic notes on two species of the families Hydrophilidae and Leiodidae (Coleoptera) from Japan. *The Entomological Review of Japan*, 60: 13–16.
- Motschulsky, V., 1866. *Catalogue des Insectes reçus du Japon*. *Bulletin de la Société impériale des Naturalistes de Moscou*, 39: 163–200.
- 佐藤正孝, 1985. ガムシ科. p. 209–216. 上野俊一・黒澤良彦・佐藤正孝編著. 原色日本甲虫図鑑 (II). 保育社. 514 pp.
- Shatrovskiy, A. G., 1989. Hydraenidae, Hydrophilidae. p. 260–293. Ler, P. A. (ed.). *Operedelitel' nasekomykh Dal'nego Vostoka SSSR v shesti tomakh*. Vol. 3. Zhestkokrylye, ili zhuki (part I). 572 pp. Nauka, Leningrad (in Russian).

(保科英人 910-8507 福井市文京 3-9-1  
福井大学教育地域科学部)

#### 【短報】感潮域からホンシュウセスジダルマガムシを採集

セスジダルマガムシ属の海岸部に生息する種は、日本からは従来、塩分濃度 0～1.8% のタイドプールに生息するシオダマリセスジダルマガムシのみが知られていた（吉富ほか, 2000）。また、海岸部の岸壁を伝う淡水中に生息する種としてニッポ

ンセスジダルマガムシが知られており（吉富ほか, 2000）、平地から山地の溪流に生息するとされていたセスジダルマガムシもニッポンセスジダルマガムシと同様の環境からも記録されている（菅谷, 2009）。今回、塩分の混じる水域に生息する種としてシオダマリセスジダルマガムシに続いて 2 種目となるホンシュウセスジダルマガムシ *Ochthebius japonicus* Jäch を河口の感潮域から採集したので報告する。本種は今まで平地から低山地の溪流や小川、大河川の中流域などに生息するとされていた（吉富ほか, 2000）。

ホンシュウセスジダルマガムシ *Ochthebius japonicus* Jäch (図1, 2)

85exs., 三重県尾鷲市三木里町八十川, 30. VIII. 2011, 稲畑採集. 稲畑・吉富保管.

採集地は、三重県尾鷲市三木里町を流れる八十川（やそがわ）である。源流部の標高は約 600～690 m ほどあるがわずかに 4 km 程度で河口に達する小川である。採集は 15 時 30 分ころから約 1 時間おこない、満潮時にほぼ完全に水没する環境を選んだ（図 3, 4）。ほとんどの個体は水面から突き出た礫の水際付近のくぼみに潜んでいるのを採集した。河床の礫はごつごつして大きく、付着藻類はほとんど繁殖しておらず水も澄んでいたので、上流域のような感じを受けた。本来上流域で採集されることの多い本種が、河口で採集されたのはこの河川長の短さが関係しているかもしれない。塩分濃度は計測していないが、満潮直後に舐めてみたところ、感潮域の上流端ではほとんど無味で、河口に近づくほど塩味を強く感じたので塩分濃度に大きな差があったと考えられる。採集個体の大部分は塩味をほとんど感じない場所で採集したが、少数は塩味を若干感じる部分でも得られた。同属のハセガワダルマガムシでは、増水により一週間ほど水没していたと推定された事例が報告されている（中島ほか, 2004）。今回の例も干満の度に海水の影響を受けない上流に避難しているとは考えにくい。満潮時は水没しているものと思われる。採集時は天気がよく暖かかったので、本種が飛ぶかどうか手のひらに乗せて実験したところ、すぐに翅を広げて飛ぶものの数センチ飛んで手のひらの上に落下する有様であった。それ以上確かめなかったが飛ぶのがあまり上手ではないのかもしれない。通常の色彩の個体に混じって背面が黒っぽい個体を 5 頭採集したが、吉富 (2012, 私信) によるとホンシュウセスジダルマガムシの擦れた個体であろうとのことである。



図1-2. ホンシュウセスジダルマガムシ. 1: 通常の個体; 2: 黒っぽい個体.